

N O R C ニ ュ ー ス

社団法人 日本外洋帆走協会

年度末を迎えてご多忙の日々をお過しのことと存じます。

願みますと、今年はいろいろのことがありましたが、その中でも、セール番号600番台の新造艇の活躍が、華々しかつたと思います。新しい艇が活躍できたということは、裏を返せば、設計の面でも、造船技術の面でも、改良の余地があつたことの証左であり、従つて今後においても、より優れた設計、より優れた造船技術が開発されるものと期待され、クルーザーの将来はまだまだ進歩の余地が十分にあるものと、胸の膨らむ思いがいたします。

会員の数も、この一ケ年間に100人以上の増加を見、1000名突破の日も目睫に迫り、まことに同慶の至りであります。ただ、会員の増加に伴つて起り易い問題は、兎角、会員間の融和の維持がむずかしくなることであります。殊に、当協会には、会員となつてからの経歴の長短、艇のクラス別、所属する支部別、フリート別、帆走技倆の優劣等、対立意識の起り易い幾多の要素がありますので、会員の皆さんには、この点に充分留意されまして、和氣に富んだ、愉快的、しかも有意義な協会にもり立てて頂かなければならないと考えております。

特に、会員相互間の帆走技術の格差については、当然のこととはいいながら、一日も早く格差を最少限に縮めるよう、技術の練磨向上に努めていただき、世界有数のこの日本近海の荒海を少しの危なげもなしに、縦横に乗りまわすことができるよう切望する次第であります。

目 次

I	本 部	1
1	第 1 4 回理事会報告	1
2	太平洋単独横断レースについて	1
3	本部連絡事項 Na	4
(a)	海上自衛艦乗艦実習希望者について	4
(b)	4 3 年度支部決算書の提出について	4
(c)	N O R C ニュース表紙用写真の提供について	5
(d)	第 6 回通常総会及び第 6 回関東支部総会開催について	5
(e)	賛助会員則武勝馬氏逝去さる	5
4	よみもの 「風」	5
II	関東支部	7
1	総務委員会	7
(a)	常任委員会	7
	第 9 回 (9 月) 定例委員会	7
	第 1 0 回 (1 0 月) 定例委員会	8
	第 1 1 回 (1 1 月) 定例委員会	8
(b)	関東支部下半期表彰式及び忘年パーティーについて	9
2	安全委員会 (記事なし)	9
3	計測委員会	9
(a)	1 9 6 9 年度定例計測委員会開催予定	9
(b)	1 9 6 9 年度上半期計測実施予定	9
(c)	活動報告	1 0
4	レース委員会	1 0
(a)	第 1 3 回神子元島レース報告	1 0
(b)	1 9 6 8 第 3 回初島レース報告	1 6
(c)	第 6 回小網代カブレース報告	1 8

(d)	1968 下半期レース入賞艇	22
(e)	1968 相模湾ポイントレース成績表	23
5	海事普及委員会 (記事なし)	25
6	事故報告	25
(a)	「くろしおⅡ」遭難事故報告	25
(b)	「足柄」事故報告	30
III	内海支部	31
1	高松レース報告	31
2	紀伊水道レース(7月21日～22日)報告の修正	33
IV	東海支部	34
1	会議の状況	34
2	1969年度支部役員の決定	34
3	1968年度東海支部レース報告	36
V	京都支部 (記事なし)	37
VI	西内海支部 (記事なし)	37
VII	会員及び登録艇	37
1	会員及び登録艇の現状	37
2	会員の移動	38
(a)	新入会員	38
(b)	住所又は勤務先変更	40
(c)	会員間の異動	41
3	新登録艇の紹介	42

I 本 部

1 第 1 4 回理事会開催

7月25日に開催された第13回理事会に於て審議され基本的に了解を得た、(社)日本外洋帆走協会組織及び運営規程(案)についての審議を主目的とした第14回理事会が下記によつて開催され、5時間余にわたる極めて熱心なる審議の結果、殆んどの議案に結論を得たが、一号議案の一部におお継続審議を必要とする点を残して審議を終了した。

記

日 時 昭和43年11月10日(日) 11:30~17:00

場 所 東京都千代田区平河町2-7 全共連ビル内 マツヤサロン

出席者 古屋徳兵衛、大儀見薫、飯島元次、高村信、横山晃、外山賢三、
吉谷竜一、颯川三郎、松木哲、角田博、丹羽由昌、田中敬一、土肥勝由

委任状 6通

審議議案

第1号議案 定款第38条に基づく、諸規程、細則の制定の件

第2号議案 昭和44年度事業計画(案)の概要説明の件

第3号議案 定款第7条による入会者承認の件

第4号議案 その他

1. 昭和44年度助成金について

2. 諸会費の改訂要望について

3. (社)NORC創立5周年記念行事について

4. 太平洋単独横断レースについて

2 太平洋単独横断レースについて

専務理事 大儀見 薫

太平洋横断シングルハンドレースが、いよいよ来年3月15日にサンフランシスコをスタートします。

当初、この企画がわれわれの所に持込まれた時は正直云つて半信半疑でした。第一に日

本側の事情としては、時期が2〜3年あるいはそれ以上早過ぎる。第二にシングルハンドで6,000哩以上の太平洋横断をするということに極めてスタンド的な要素が強く、そのため果してまともなエントリーがあるかどうかということが心配でした。はつきり云つて、ヨットとは関係のない興行的な仕事しておられるアートライフアソシエーションがプロモートしている点に多少の懸念がありました。

しかし、第一回太西洋シングルハンドレースを手がけたスローカム協会が、レースの組織に当ることを決定し、しかも、フィニッシュはNORCで引受けて頂きたいという強い意向がハッキリしたことで、レース自体の組織と、それをプロモートする方の問題とは切り離すべきであるというスローカム協会側の考えもはつきりしたので、フィニッシュ側としてレースの組織に協力することになりました。実際、レースに参加して太平洋を2ヶ月以上の日数をかけてフィニッシュして来るヨットマン達を、海の男達にふさわしく迎えることができるのは、NORC以外にないだろうという事情も、この決定の大きな要素でした。

現時点でのエントリーは次のようなものです。

CLAUS HEHNER (西ドイツ)……本年度大西洋シングルハンドレース参加、スループ、14位でフィニッシュ。

EDITH BAUMAN (西ドイツ)……26才の女性(「舵」12月号に紹介された。)、同じく本年度大西洋シングルハンドレースに参加、トリマラン、途中遭難し救助された。

ERIC TABARLY (フランス)……チチエスターと並ぶシングルハンダーの第一人者、フランス海軍の現役将校、フランス代表としてRORC, CCA, オーストラリア等世界の代表的オフショアレースの殆んどのものに出場して、しかも抜群の成績を残している。本年度大西洋シングルハンドレースに参加、73呎トリマラン、途中接触事故のためリタイア。

MARC CUIKLINSKY (フランス)……本年度大西洋シングルハンドレースに参加、スループ、途中遭難救助された。

JERRY CARTWRIGHT (アメリカ)

EUGENE MARTINSON (アメリカ)

他に、アメリカから一名、1964年度の大西洋シングルハンドレースに参加した者。

アメリカのエントリーについては、詳しいことは解りませんが、いずれもベテランのようです。このような経験豊富な世界の一流のシングルハンダーの参加を得たことは素晴らしいことです。

なお、TABARLYを含めて、以上参加7名の内、4名は本レースのために新艇を造っています。これは全長24呎以上35呎以下というレース規定と、小笠原辺までは殆んど追風のレースになるだろうということのため、この条件の中で最大の性能と安全性を確保することをねらつたもの。

搭載備品は下記のものが規定されている。

List of Equipment.

- One spin set of working sails
- One set of storm sail
- Bow and stern pulpits with life line 24' above deck
- One tool box
- One spare tiller
- Enough spare line for all sheets and halyards
- Shut off on all opening near or below water line
- Radio receiver with "marine band"
- Chart and navigation equipment-if no chronometer
second radio must be carried.
- Two properly adjusted compasses
- Two bilge pumps
- Two fire extinguishers in accordance with regulations
- One first aid kit with instruction book
- Ten red parachute flare
- One fog horn

Two water proof flashlights and spare batteries

Two hundred liters (45 gallons) of water in at least

2 tanks

Stores sufficient for a period of three months

これは大西洋シングルハンドの規定（下記）に準じたものだが、若干増えている。ライフボートはこのリストにないが追加される予定。

1968年大西洋シングルハンドレース安全備品リスト

Inflatable life raft

Radar reflector

Foghorn

Daylight distress signal

Flares and pyrotechnic distress Signals

Fire extinguisher.

なお、NORCとしては近く太平洋シングルハンドレースコミッティーを編制して、フィニッシュラインの設定を決定したり、フィニッシュの際の税関、検疫手続きの方法につきできるだけ簡素化して、快く迎えるよう努力することとしています。

3 本部連絡事項

(a) 海上自衛艦乗艦実習希望者について

海上自衛隊のご好意による乗艦実習は、NORCニュース第17号の記事のごとく、まことに好評を得ましたので、若し44年度にも多数の乗艦実習ご希望の方がありましたら、引続き実習のことに取り運びたいと思います。各支部にて希望者の数をお取纏めの上至急ご報告願います。

なお航海訓練所の練習船の乗船実習については只今折衝中であります。

(b) 43年度支部収支決算書の提出について

各支部の事務担当者の皆さん、1ケ年間いろいろとご苦労さまでした。又年度の変り目が来まして何かとお忙しいことでしょうか、例年にならい43年度の収支決算書を遅

くとも来年1月20日までに到着するよう、ご提出願います。

(c) NOROニュース表紙用写真の提供について

昭和44年度より、NOROニュースももう少し味わいに富んだものにしたいと思つて
ています。その第1段階として、表紙に写真を入れたいので、快走するヨツトの写真で
これこそ傑作なりこれによつてNOROニュースの表紙を飾つてやろうという奇特な方
がありましたら至急ご提供をお願いします。ただし

(イ) NOROの登録艇であること

(ロ) カラー、白黒 どちらでもよい

(ハ) サイズ キャビネ(ネガ添付の場合はサイズを問わない)

なお来年度は、PR用パンフレットの作成を予定しています。パンフレット用の写真も
必要でありますので、振つてご協力を願います。この方は大小さまざまのものが必要で
あります。

(d) 第6回通常総会及び第6回関東支部総会は会場使用の都合により昭和44年2月23
日(日)に「マツヤサロン」にて開催いたします。

(e) 賛助会員則武勝馬氏逝去さる

(社)NORO発足以来本年3月31日まで、常務理事として、ご手腕を縦横に発揮
され、社団法人としての揺がぬ基礎を築かれた則武勝馬氏は岡山医大病院にご入院加療
中のところ、12月13日朝、薬石効なく逝去されました。謹んで哀悼申し上げますと
ともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

4 よみもの

「風」

ヨツトの原動力である風がなくては、いかなるヨツトの名手も羽をもぎとられた鳥と変らな
いであろう。それほどに風とヨツトマンの因果関係は深いが、限度を超えた強風には親しめな
いばかりか、却つて生命を狙われているような恐怖さえ抱かせられる。

風については、帆船時代から、いろいろ云い慣らされた言葉が沢山にある。季節季節の、そ
して地方、地方の古来よりの呼称は、まことに興味深い。そして耳新しいものがあるので、

季節を追つて、手近な文献から拾つてみたい。

(1) 冬の風

一年中で冬が一番風が強い。それはまず冬型の気圧配置から始まる。初冬に吹き始める風を「風」又は「木枯」と書いて「こがらし」といつているが、大陸低気圧が日本海を東に進むとき、その中心から南西に伸びる寒冷前線が深い気圧の谷を伴つて、日本の上を通過する。このとき冷たい強い風が吹きわたり、木の葉を飛ばし、枝を奏で、いかにも風が木々を枯らしてしまうように思われるので「木枯」という名を与えられた。

寒冷前線の東側では南西の風が吹き、通過後の前線の西側では、強い北西の風に急変するとともに急激に気温が低下して、突風やしゅう雨を伴うことが多い。従つてヨットマンにとつては、この強い寒冷前線の通過のときは、台風と並んで、最も注意を要する気象状態といふべきであろう。

×

×

初冬の頃に北東の風が吹くことがある。「伊勢の国鳥羽、あるいは伊豆国の船ことば」として「10月（陰歴）の中旬に吹く北東風を“星の出入”という。夜明けにスバル星西に入るときに吹くなり」と記されており、また「畿内及び中国の船人のことば」として「10月（陰歴）の風を“星の入り東風（ごち）”という。11月12月ごろ吹く風を大西という」といわれ、スバル星の出入りの頃日和が変りやすく、これを漁師仲間では「星の入東風」（ホシのイリゴチ）という風雅な表現でいい現わしている。

×

×

また、関東地方で吹く東北の風は、なべて「ならい」といい、ものの本にも「江戸にては東北の風を“ならい”という。“つくばならい”というあり」とあつて、筑波山の南側では筑波山の方から吹く北寄りの風を「筑波ならい」といい古るしている。伊豆の島々では、東北がかつた風を「下総ならい」といい、北風の場合には「本ならい」といつている。しかしこの「ならい」という語は、関西方面では殆んど聞くことができない。

この外に関東の冬の風には、今でもいい慣らされている「からつ風」というのがある。殊に「上州の空ツ風」を知らない人はあるまい。これは云うまでもなく、裏日本に雪を降らせて乾燥しきつた風が、山脈を越えて、寒い風となつて関東に吹きすさび、砂塵を吹きまくつ

て、海にまで及ぶことが多い。

×

×

これら冬型気圧配置の所産である北寄りの季節風が中央の山脈を越えて太平洋岸に吹き出して来るもので何々風（おろし）と云つて、地方、地方の名山の名を冠せて呼称される場合が多い。富士風、比叡風、筑波風、御神火風などはこれである。

×

×

関西の船頭達の間には「乾風」（あなじ又はあなせ）という風がある。これは関西方面に吹く北西の季節風のことであつて船頭間では海が荒れるので「乾風」とは誠に怖い風であるとされている。

×

×

こうして風の吹く日の多い冬の季節にも稀れに、ベロンコの日がないわけではない。ことに11月には凧の日が続くことがある。11月は親鸞上人の忌日のある月であつてこれを“お講”といつているので、この頃の凧を特に「お講凧」と名付け、上人の御利益の一つとされているがヨットマンにとってはご利益どころではない。又寒中のベロンコは「寒凧」といい、風に関しては風があつても、なくても、呼びやすい名が与えられていておもしろい。

（次号「春の風」）

II 関 東 支 部

1 総務委員会

(a) 常任委員会

9月定例常任委員会（昭和43年9月17日（火）18：30 出席者19名）

- 議題
1. NORO夏祭り及び上期入賞艇表彰式の終了報告
 2. NORO海洋教室の終了報告
 3. NORO運営規程（案）の審議について
 4. その他
 - a) 学生ヨットグループとの懇談会の経過について

- b) 横浜ヨットハーバーの現況について
- c) クラスVの非公式レースの実施について
- d) 太平洋横断レースの進捗状況について
- e) 本年度会費納入現況について
- f) 神子元島レースの帆走委員長の決定について
- g) 次回常任委員会の日取変更について

10月定例常任委員会（昭和43年10月8日（火）18：30 出席者15名）

- 議題
1. 第13回神子元島レースの開催について
 2. 第3回初島レースの開催について
 3. ミヤ、早風、翔鶴遭難周忌法要の供華等について
 4. その他
 - a) 太平洋単独横断レースの現況について
 - b) シリーズカップレースについて
 - c) クラスVの非公式レース実施の説明について
 - d) 宇都宮セーリングスクール協力について
 - e) NORO5周年記念行事について
 - f) 諸ルールの改正について

11月定例常任委員会（昭和43年11月5日（火）18：30 出席者19名）

- 議題
1. 第13回神子元島レースの終了報告
 2. 1968第3回初島レースの終了報告
 3. 第6回小網代カップレースの開催について
 4. 第14回理事会の開催について
 5. その他
 - a) 1968下期レース入賞艇表彰式の開催日等について
 - b) 太平洋単独横断レースの経過報告について
 - c) 会費納入の現況
 - d) 関谷会長の病氣見舞について

- e) 「みや」遭難者を偲ぶ会（於ヨッテル）出席について
- f) 米海軍申出での下田スタートのレースについて
- g) レース方法の再検討について

(b) 関東支部下半期表彰式及び忘年パーティーについて

12月9日（月）18：00より日本船舶クラブにて本年度下半期の各レース入賞艇の表彰式を開催し、引続いて忘年パーティーを盛大に実施いたします。

2 安全委員会 （記事なし）

3 計測委員会

(a) 1969年度定例計測委員会開催予定

1969年度定例計測委員会の開催日は下記の通りです。

1月22日（水）	7月16日（水）
2月19日（水）	8月20日（水）
3月12日（水）	9月17日（水）
4月16日（水）	10月 8日（水）
5月21日（水）	11月12日（水）
6月18日（水）	12月10日（水）

(b) 1969年度上半期計測実施予定

1969年度上半期（1月～6月）の計測実施日及び計測担当者は、次の委員及び助手に決まりましたのでお知らせします。

1月19日	国松	高橋
2月16日	林	河上 北村
3月 9日	今北	関根（照久） 横山
4月13日	国松	高橋
5月18日	林	北村
6月15日	今北	高橋

(c) 活動報告

1968年度下半期(7月~12月)計測艇 11隻

「朝日」「雲仙」「RED SHARK」「UNIVAC」「足柄」

「CHRISTINA II」「竜飛」「MISS SUNBIRD」

「月光II」「CONTESSA II」「TONGA」

(周東記) 43.12.6

4 レース委員会

(a) 第13回神子元島レース経過報告

昭和43年10月25日

帆走委員長 稻垣豊郎

- (1) スタート 43年10月18日 23:00
- (2) コース 小網代~神子元島~小網代 約99漕
- (3) 出走艇 18隻(参加人員 102名)
- (4) 天候 スタート時 晴 N~NNW 4~6m
- 19日 晴 午前中 NE~NNE 8~12m
- 午後 " 6~8m

(5) レース経過

月のない夜のせいか星が非常に多い。しかし海上は真暗でやけに静かだ。スタートラインを従来より思いきつて沖に出し、小網代湾口大謀網の先端から北寄りに設定した為ウネリと小波がやや高い。23:00に15分前頃より点々と紅緑の航海灯が忍びやかにスタートライン近くへ集まつて来た。Nないし、ややWよりの軟風が爽やかに吹いている。23:00時報に10秒程遅れてトップ艇スタート。以下続々ジェノアにフルメンズルで風上側のマークボートよりにスタートし、23:03最終艇が出走。18隻全艇神子元島へ向つた。

スタート後しばらくトップにいた「はやまる」に間もなく天城、智美が並びすぐ後方を潮風、飛車角、レッド・シャークが続く。この頃全艇スピネカを展開したが風がやや落ちたところへ相変わらず波が悪く、01:00頃までスピワークに難儀した。しばらく

くして天城、潮風の2艇が神子元島へ真直のコースをとつたが、他艇は殆んど門脇へ向うオーソドックスなコースをひいた。風もようやくNE4~6mに安定し、快調な艇足である。19日稲取近くで全艇視認出来る程度に明るくなり、風はやや強く8~10m位だろうか。トップは神子元島へ直接向かつた天城、潮風である。

神子元島海域は非常に波が悪く「はやまる」がスピンプーム先端を波に突込んだと見るまでに、ブームリフトのブロックがすつとび、一瞬の後にブームが跳び上がりスピントラブルを起した。これを見て危険を感じた後続艇は早めにスピンを下ろし始めた。

本年のこのレースは神子元島の回航方向に制限をつけなかつたが、NE風の為全艇反時計回りに回航し始めた。

06:58天城がトップに回り利根、大島間へ向かう。続いて06:59潮風、07:05智美、07:08「はやまる」以下レッド・シャーク、飛車角、さがみ、雲仙の順に回り、「もさ」がクラスⅣのトップで9番目に回つた。続いてメルジーネ、シレナが数分差で追う。神子元島からは殆んどの艇が真東(90)にコースをとつた。天城を追う潮風はやや南に下り、レッド・シャークがすばらしい上りで快調に「はやまる」を追い上げる。すぐ後方を飛車角がくいさがつている。この頃から先頭集団のうち潮風と智美がやや遅れ出し、天城、飛車角、「はやまる」、レッド・シャークの4艇がデッドヒートを展開し始めた。風も更に強まり、クラスⅢには絶好な12~3m前後で文句なしのレース条件だろう。

「もさ」、メルジーネ、シレナの順で神子元島を回つたクラスⅣでは「もさ」がジブ交換中にメルジーネ、シレナが抜き、数分後にシレナがトップに立つた。

先頭を快走する天城に「はやまる」がワンタック後追い付いたが、天城までもタックし、大島岸寄りに北上する。「はやまる」はやや沖よりを北上。この時飛車角が大島岸寄りを一気に走り抜けるようにしてトップに踊り出た。風早附近でまでも天城、飛車角、「はやまる」、レッド・シャークの4艇が競合い飛車角、「はやまる」、天城、レッド・シャークの順で東進する。クラスⅢにしばらく遅れて大島岸寄りにくつついたシレナは、風が次第に落ち、日没直前に大島をクリアした。この頃「さがみ」は伊豆半島寄りから東航し、足柄、「もさ」等がシレナの視界にあり、メルジーネが伊豆岸寄りに突込んでいくのが望

見出来た。

レース本部へは17:45足柄の福永艇長からアバツシユラウンドターンバックルトラブルの為123°リタイアし17:15伊東へ入港したとの電話が入った。レッド・シャークと略同型の足柄には誰しも期待していただけに残念でならないが、マスト折損等事故に至らなかつたのは不幸中の幸いというべきで、艇長以下乗組員の迅速且つ適切な処置のためものに違いない。出来るだけ早く整備を完了し栄光の重巡として戦列に復帰されるよう希望してやまない。

日没時、NE6m位、見事な夕焼空に赤く染まつたスムーズな相模湾上では陸の人たちには想像もつかないような、男の意地と面子をかけて、丸一昼夜もの死闘が続けられている。辺りが暗くなる頃「はやまる」がトップに立ち飛車角、天城が続きレッド・シャークが執拗に喰い付いて離れない。すつかり暗くなつて夫々の艇の動静を確認することが出来なくなつたが、ビーンと張りつめた糸でお互が結ばれているかのように、闇を通して緊張感が伝わってくる。少しでも気を抜いたら敗ける事は誰にもいやという程わかっている。しかしこれもあと数時間で終りだ。早くフィニッシュして熱い風呂に飛び込み、ぐつすり寝たい。何もかも忘れて……………

予想外に早く小網代湾口近くに姿を見せ始めたトップグループは天城、飛車角、「はやまる」、レッド・シャークと相変わらずの顔ぶれで、前後して……フィニッシュ予告信号をし始めた。大謀網の辺りで「はやまる」が飛車角を蹴落として前へ出、自艇の登録番号を発信しだした。一度に3隻の信号を送られたコミッテイは判別が容易でなく仲々確認の返信がうてない。ついにたまりかねたフィニッシュ艇はどなり出し、天城、はやまる、飛車角の順に秒差でなだれ込んだ。7分程してレッドシャークがフィニッシュ。トップグループに24分遅れて江の島寄りに深入りしすぎた雲仙がフィニッシュ。続いて智美、潮風がフィニッシュした。トップ艇に2時間程遅れてクラスIVのベテラン、シレナがフィニッシュ。5分遅れて「もさ」、更に2分遅れてメルジエが入つた。しばらくして「さがみ」、「はやとり」、チルデの順に19日のうちにフィニッシュ。20日のミッドナイトを迎えた。後続艇がばつたり途絶え、辺りはまたもとの静けさを取り戻した。気温はかなり下がり、NNWの風が頬を刺す。沖の漁火が波間にかくれたり出たりする為、仲間のフ

イニッシュ信号とまぎらわしくいららす。チルデの後4時間してサンゴがフィニッシュ。その1時間後にオリンパス、更に1時間たつた05:19'37"に八丈がフィニッシュし、レースを終了した。

シーウイッチは19日13:30頃メンスルピークのボルトロープが切断しメンスルがずり落ちた為、リタイアに決し、機走して小網代に入港。コミッテイーに連絡してきた。結局18隻出走したが2隻リタイアしたので16隻が完走した。このレースはレッド・シャークと足柄、及び天城と雲仙の夫々略同型艇と飛車角、「はやまる」等の新型クラスⅢ艇が本格的に相まみえると同時にクラスⅣ艇がこれが新艇群にどこまで戦うかという問題等興味あるレースとして期待されていたが、予想にたがわず豪快なレースを展開した。その結果、着順7位迄クラスⅡ、Ⅲが占め、総合順位でもクラスⅢ新艇が4位迄独占してしまつた。途中数回首位を奪われはしたが、終始安定してトップを走り堂々ファーストホームした天城、注目のレッド・シャークはファーストホームは逸したが総合で見事優勝した執念。異色の乗組員を揃え元祿ムード?で走っているかのようで天城に1分32秒差で着順2位、レッド・シャークに21秒差で修正2位となつた「はやまる」。最後の詰めを誤つた為にファーストホームを逸した飛車角。着順8位とはいえ、これらクラスⅢに互して修正5位になつたシレナの善戦は称えられてしかるべきであろう。このシレナに5秒差で6位になつた雲仙は最後のタック時期の判断を誤らなければ文句なしにシレナを押えたものと惜まれる。ともあれ出走した登録番号600台の艇7隻のうち足柄を除いた全部が1~6位迄の着順を占めてしまつたことからみても、新旧交替の時期と考えるのは早きに過ぎるだろうか。またクラスⅢとクラスⅣとの走り方が今回のようにはつきり色分けされてしまつた事も、今迄になかつた事で、今後のレース運営に問題を投じたものといえよう。

すばらしい快晴が続き適度な風のもとで快適なレースが出来、さしたる事故もなくレースを終了出来た事は帆走委員として大変喜ばしく、各位のご協力に感謝します。横須賀海上保安部へは20日09:05最終連絡としてレースが無事終了した事を報告し、10:00をもつてレース本部を閉鎖する旨連絡した。終始ご援助頂いた保安部に毎度の事乍ら深甚の謝意を表します。

なお、提出された航跡図に記入された神子元島回航の計時に疑問のある艇が数艇あつた

ので、心当りのむきは注意されたい。

以 上

第13回神子元島レース成績表（昭和43年10月18日～20日）

10/18 23:00スタート レース帆走委員長 稲垣豊郎

着順	クラス	セール No.	艇名	T.G.F.	オーナー	艇長	所要時間 (ET)	修正時間 (CT)	順位	
									クラス	総合
1	Ⅲ	615	天城	.754	渡辺	渡辺	時分秒 21.26.19	時分秒 16.09.53	Ⅲ ③	③
2	"	614	はやまる	.751	立松	武市	".27.51	16.07.11	" ②	②
3	"	610	飛車角Ⅱ	.762	名和	周東	".28.41	16.22.01	" 4	4
4	"	616	RED SHARK	.746	関根	関根	".36.01	16.06.50	" ①	①
5	"	622	雲仙	.757	反田	田辺	22.00.18	16.39.28	" 5	6
6	Ⅱ	606	智美	.778	津野	津野	".23.53	17.25.32	Ⅱ ①	10
7	"	358	潮風Ⅲ	.781	竹下	竹下	23.05.57	18.02.26	" 2	12
8	Ⅳ	179	SIRENA	.706	大儀見	村本	".35.33	16.39.23	Ⅳ ①	5
9	"	394	MELUSINE	.731	武部	武部	".40.41	17.18.31	" 4	9
10	"	366	もさⅢ	.710	守屋	守屋	".42.51	16.50.13	" ②	7
11	Ⅲ	164	さがみⅡ	.741	飯島	飯島	".59.55	17.46.59	Ⅲ 6	11
12	Ⅳ	312	はやとり	.707	草間	草間	24.23.42	17.14.50	Ⅳ ③	8
13	Ⅲ	367	TILDE	.739	JANSSEN	JANSSEN	".39.28	18.13.20	Ⅲ 7	13
14	Ⅳ	346	SUNGO	.701	鳥飼	鳥飼	28.21.03	19.52.26	Ⅳ 5	14
15	"	315	OLYMPUSⅢ	.701	落合	落合	29.12.16	20.28.20	" 6	15
16	"	381	八丈	.709	近藤	近藤	30.19.37	21.30.06	" 7	16
Ret.	Ⅲ	617	足柄	.745	福永	福永	D. N. F			
Ret.	"	341	SEA WITCH	.739	WITHERBY	WITHERBY	D. N. F			

昭和43年10月25日

第13回神子元島レース会計報告書

稲垣豊郎

収 入

出艇申込料	21艇×2,000	42,000
申込遅延料	2艇×2,000	4,000
会員参加料	77名×1,000	77,000
非会員参加料	7名×3,000	21,000
	合 計	¥144,000

支 出

本部運営費(宿泊、飲食、交通費等)		35,570
マークボート及び通船借用料(シーボニア)		5,125
シーボニアヨットクラブ謝礼		1,000
コミッティーボート借艇謝礼(おうりゆう)		5,000
同 上 郵送料		130
ライフライン用バッテリー 270V, 1ケ		1,300
帆走指示書追記コピー料		500
特設電話設置料		4,890
帆走指示書印刷費		1,500
第1回艇長会議借室料		2,100
	合 計	¥57,115

差引残高 86,885円

(b) 1968年第3回初島レース経過報告

レース帆走委員長 松下浩三

1968年第3回初島レースは、下記の経緯により中止とした。

10月26日、16時の気象通報によると、三陸沖にはかなり発達した低気圧があり、一方大陸の高気圧は、本州南岸に大きく張り出していて、本州沿岸一体はこの高気圧から低気圧に吹き込む西風が、15m～20mに達していた。又海上は台風19号、21号の余波もあり、かなり大きなうねりがあった。このような状況下でコミッティーボートたる JOVIAL FIVE II は所定の位置にリミットマークを設置し、あわせてスタート海面を視察すべく、小網代湾口に向つたが、強西風とうねりで、同海面の海象状況きわめて悪く、リミットマークの設置は、定置網内側まで後退しない限り不可能であり、まして定置網の先端にライトをつけることは全く、不可能であることを確認した。一方、今後の気象、海面状況につき、気象庁に再三照会を行なつたが、夜半多少風は落ちるが、西又は西北西の風が10m前後27日一杯吹き続け、海面の状況はかなり悪いであろうとの予報であつた。

以上の状況に鑑みレースコミッティーは、レース実施の可否を討議すべく、艇長会議を開催することに決定し、この旨を海上保安庁に連絡した。これに対して海上保安庁からは、「勧告ではないが、中止を強く希望する」旨の申し入れがあつた。(この時点に於てレースコミッティーとしてはレース中止の方針をほぼ決定した。)

艇長会議においては、レースコミッティーより

- (1) 当日午後4時の気象状況と、今後の気象状況に関する気象庁の見解。(すなわち今後24時間は、強風が吹き続き1、2時間延長しても事態は好転しないこと。)
 - (2) スタートラインを所定の位置より、相当内側に寄せねばならぬが、小網代湾には、大型漁船が一隻避難していることもあつて、スタートライン及びリーショアには十分なスペースがとれないこと。又スタートしても、両側に東西に延びる定置網があつて多数の艇が夜間セーリングでスタートするには、かなりの危険が予想されること。
 - (3) 海上保安庁より中止の希望が出ていること。
- を説明した。

ついで同日江の島から回航してきた MAUPIII II、及び横須賀からの SEA WITCH

に海象状況の説明を求めた処、MAUPI TIより海象状況極めて悪く、アビーム以上には風上にのぼれないこと。又同艇は出艇を見合わせる旨回答があり、更にSEA WITCHより同様の説明があつた他、同艇のグーズネックが破損したこと、海象状況は悪化を辿つてゐること、自艇より小さな艇は危険であると思ふ旨付言があつた。

以上の状況によりレースコミッティーは、レース実施に反対である旨を表明し、併せて各艇長の意見を求めた処、積極的にレース実施を主張する艇は無く、レース中止又は中立（特に小型艇）を表明する艇が大半であるとの確認を得たので、直ちに中止を決定した。

以 上

なお、今回のレースについては、前記事情に鑑み、レース出艇料は徴収しなかつた。

4 3. 1 1. 4

昭和43年11月5日

第 3 回 初 島 レ ー ス 会 計 報 告 書

レース帆走委員長 松 下 浩 三

収 入

出艇申込料	26艇×2,000	52,000円
申込遅延料	2艇×2,000	4,000円
合 計		56,000円

支 出

本部運営費（宿泊、飲食、交通費等）	20,500円
第1回艇長会議借室料	2,100円
特設電話設置料	3,600円
帆走指示書印刷費	1,500円
テンドー等謝礼	1,000円
合 計	28,700円

差 引 残 高 27,300円

返 戻 金 $\frac{27,300}{26艇} = 1,050円$

(c) 第6回小網代カップレース経過報告

昭和43年12月3日

帆走委員長 大谷正彦

第6回小網代カップレースは11月23、24日小網代一丈島(時計まわり)一小網代約68漕のコースでおこなわれた。

大陸方面から張り出してきた大きな移動性高気圧に日本全土がすつぽりおおわれた小春日和の好天気の中で出走艇22艇が勢ぞろいした。出走艇中クラスⅡは2艇、クラスⅢ12艇、クラスⅣ8艇で新鋭のクラスⅢ艇が多数参加し、いよいよクラスⅢ時代の到来を思わせ、今年度最後の外洋レースにふさわしい好レースになるものと期待された。

23日10:00N2~3mの微風での壮観なスタート、全艇スピナーカを展開して一路南下、はやまる、天城、MISS SUNBIRD、RED SHARKなどによるトップ争いがはじまる。12:00頃より風が次第に弱まり各艇本船航路上で苦勞する。この本船航路付近に強い潮流(W→E)があり各艇共この間にかなり東へよせられている。この潮流が後の大島回航の困難さの前ぶれとなつた。16:00頃風次第にSにまわりSWの風が吹きはじめた。各艇快調にとばし日没時には大島東岸に達した。大島東南岸には大島の反時計まわり方向に流れる強い潮流(約3kt)があつたため夜間の竜王崎回航がこのレース最大の難関であつた。吹きつゝのSWの風(10~15m/sec)と潮に各艇共同じ所を行きつゝもどされつゝで難航した。この間大型艇は艇速を利用してこれを乗り切り、また小型艇のうちでも思い切り岸にへばりついた艇や明け方になつて岸をなめた艇がようやく南岸をかわした。竜王崎S通過順位は智美、OLYMPUSⅢ、はやまる、くろしおⅡ、MISS SUNBIRD……の順であつた模様であるが上りコースのためあまり正確ではない。上記の竜王崎付近で各艇夫々の判断により回航を断念し、リタイアする艇が続出した。出走22艇中12艇がここでリタイアし、10艇が大島を回航した。

大島を回航した艇団のトップグループは24日09:00頃大島北岸を離れ小網代を目指した。10:00頃風が落ち艇速にふる。トップグループは飛車角、智美、MISS SUNBIRD、はやまる、OLYMPUSⅢ等で微風をつかんでの神経戦となつた。クラスⅣのOLYMPUSⅢとSIRENAが大型艇から離れずによく走つた。

一方、フィニッシュラインで待期するコミティボートでは続々入港してくるリタイア艇の報告に、果して無事回航してくる艇が何艇あるか、この微風では18:00のタイムリミットまでに全艇フィニッシュできるだろうかと気をもんでいた。15:20コミティボートより油壺沖にレース艇の船影を発見し安堵する。16:13 MISS SUNBIRD、フィニッシュ、はやまる、飛車角Ⅱ、くろしおⅡがフィニッシュした頃よりSWの風が吹きはじめ後続の艇も追いつく様に続いてフィニッシュし、またたく間にレースは終了した。

フィニッシュした艇はMISS SUNBIRD、智美(以上クラスⅡ)、はやまる、さがみⅡ、くろしおⅡ、飛車角Ⅱ(以上クラスⅢ)、OLYMPUSⅢ、SIRENA(以上クラスⅣ)の8艇であり総合では健闘したOLYMPUSⅢが優勝し小網代カップを手中にした。以下2位SIRENA、3位はやまるの順であつた。竜王丸とMELUSINEは大島を回航したが惜しくもリタイアした。リタイア艇14艇の帰港を確認し、24日18:00海上保安部へレース無事終了の旨報告し、20:00レース本部を解散した。

帆走委員会一同、至らぬ点が多々ありましたが、海上保安庁をはじめ関係各位のご援助により、快晴のもと大きな事故もなく無事レースを終了できましたことをご報告します。なお、本レースで問題となつた点、気のついた点などを列記します。

1. 参加申込をしておきながら第2回艇長会議に何の連絡もなくコミティーをやきもきさせた艇 …………… コンテツサⅡ
2. 航海灯が滅火したまま長時間帆走し他艇を悩ませた艇……………くろしおⅡ
航海灯が故障しているときはセールにライトをあてたまま走るとか、応急の航海灯を作るとかして、他艇のじやまをしないよう十分配慮すべきであろう。
3. 航跡図の提出をおこたつた艇……………2艇(但しDNF艇)
4. リタイアした艇はクラブ旗、エンサインを掲げなければならないことになつている(1968年度外洋レース規則)にもかかわらずこれを守らぬ艇が多く、コミティボートから出場艇かどうかの判別が困難であつた。

以 上

第6回小網代カップレース成績表(43.1.23~24)

レース帆走委員長 大谷正彦

総合 順位	着 順	セー ル 番	ク ラ ス	艇 名	T.C.F.	オ ー ナ ー	艇 長	所要時間 (E. T.)	修正時間 (C. T.)	クラス別 順位
								時分秒	時分秒	
1	8	315	IV	OLYMPUS III	.701	落 合	落 合	31.02.15	24.45.26	IV ~ 1
2	7	179	"	SIRENA	.706	大 儀 見	村 本	31.02.02	21.54.36	" ~ 2
3	2	614	III	はやまる	.751	立 松	武 市	30.33.53	22.57.15	III ~ 1
4	6	164	"	さがみ II	.741	飯 島	飯 島	31.01.50	22.59.37	" ~ 2
5	4	613	"	くろしお II	.751	中 島	北 沢	30.41.25	23.02.54	" ~ 3
6	3	610	"	飛車角 II	.762	名 和	周 東	30.39.26	23.21.39	" ~ 4
7	5	606	II	智 美	.778	津 野	津 野	30.53.12	24.01.47	II ~ 1
8	1	380	"	MISS SUNBIRD	.829	山 崎	武 村	30.13.20	25.03.15	" ~ 2
		199	III	SALMON II	.756	富 永	飯 島			
		305	"	竜王丸	.743	森	宮 沢			
		341	"	SEA WITCH	.739	K I N G	W I T H E R B Y			
		357	"	NEPTUNE K	.746	古 屋	上 野			
		367	"	T I L D E	.739	J A N S S E N	J A N S S E N			
		615	"	天 城	.754	渡 辺	星			
		616	"	RED SHARK	.746	関 根	関 根			
		617	"	足 柄	.745	福 永	福 永			
		346	IV	S U N G O	.701	鳥 飼	鳥 飼			
		361	"	AOLELE II	.711	向 井	神 服			
		366	"	も さ III	.710	守 屋	吉 田			
		394	"	MELUSINE	.730	武 部	武 部			
		608	"	明日香	.703	加 藤	一 色			
		618	"	だぼはぜ II	.700	土 屋	土 肥			
		188	II	CONTESSA II	.777	石 原				
		358	"	潮 風 III	.781	竹 下				
		622	III	雲 仙	.757	反 田				
		312	IV	はやとり	.707	草 間				

1位 OLYMPUS III
 入賞艇~総合 2位 SIRENA FIRST HOME~MISS SUNBIRD
 3位 はやまる

第6回小網代カッブレース会計報告

レース帆走委員長 大谷正彦

収 入

出艇申込料	26隻	52,000円
出艇遅延申込料	2隻	4,000円
参加料(会員)	90名	90,000円
" (一般)	18名	54,000円
合 計		200,000円

支 出

レース本部運営費(宿泊費、食費、交通費)	43,210円
第1回艇長会議借室料	2,100円
コミッティーボート(NADJAⅡ)借料	5,000円
通船借料(船外機付)	2,840円
特設電話架設費(度数料含まず)	3,860円
印刷費(帆走指示書、出艇表等)	1,500円
消耗品代(電池、用紙、ボールペン他)	1,625円
雑 費	2,615円
合 計	62,750円

差 引 残 額 137,250円

(d) 1968' 下半期レース入賞艇

NORC関東支部

レース名		第13回神子元島	1968' 第3回初島	第6回小網代カップ	
種別		(10/18~20)	(10/26~27)	(11/23~24)	
優勝杯		神子元杯	初島杯	小網代杯	
総合賞	1	RED SHARK	レ	OLYMPUS III	
	2	はやまる		SIRENA	
	3	天城		はやまる	
ク	1	智美	I		
	2	—			
	3	—			
ラ	1	RED SHARK	中		
	2	はやまる			
	3	天城			
ス	1	SIRENA	止		
	2	もさIII			
	3	はやとり			
賞	1				
	2				
	3				
ファーストホーム賞		天城			

相模湾 下期 1. はやまる 2. MISS SUNBIRD 3. 飛車角II 舵杯(クラスIVの艇)
 ポイント レース 年間 1. はやまる 2. 飛車角II 3. SIRENA

神子元島シリーズレース 1. RED SHARK 2. はやまる 3. 飛車角II

1968相模湾ポイントレース成績表

43.12.9

NORC関東支部

ク ラス	セー ル No	艇 名	T O P	月							前 期			11月迄			年間 BEST 8	年間 順位	下期 順位	年間 順位		
				1	2	3	4	5	6	BEST 4	7	8	9	10	11	BEST 8					12	BEST 8
II	380	MISS SUNBIRD	.829	—	4	—	—	—	—	—	4	19	23	—	—	1	2	49⑨	9	58	②	6
	355	L O T U S	.794	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	—	—	—	—	4	5	9		7
	358	朝風Ⅲ	.781	1	2	9	—	19	11	41	⑦	9	2	—	—	1	1	54⑥		54		
	323	K — 7	.778	—	—	—	1	2	—	—	3	—	—	—	—	—	—	3		3		
	323	CHRISTINA II	.778	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	3		
	606	智美	.778	—	—	—	—	4	16	20	—	7	16	—	—	1	6	50⑧	2	52	6	9
	188	CONTESSA II	.777	—	5	5	2	2	6	18	—	—	—	—	—	—	—	20		20		
II	388	稲竜	.772	—	2	11	—	—	—	9	22	⑩	—	—	—	—	—	22		22		
	610	飛車角II	.762	1	9	23	7	9	23	64	②	16	—	—	—	1	19	107②	13	119	③	②
	622	雲仙	.757	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	—	—	1	9	17	2	19		
	199	SALMON II	.756	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	—	1	—	7		7		
	615	天城	.754	23	2	19	—	—	—	—	44	⑤	—	—	—	1	13	67⑤		67	8	5
	613	くろしおII	.751	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	—	—	1	23	26	16	42	4	
	614	はやまる	.751	1	13	16	16	23	19	74	①	23	19	—	—	1	16	145①	23	155	①	①
	357	NEPTUNE K	.746	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	3		3		
	616	RED SHARK	.746	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	11	12	11	23	7	
	617	足柄	.745	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	19	19	10	
	190	月光II	.744	—	—	—	11	2	—	13	—	2	11	—	—	—	—	26		26		
	305	竜王丸	.743	1	—	1	6	2	2	11	—	4	2	—	—	1	5	23		23		
	179	あさひ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2		2		
	164	さがみII	.741	—	—	—	—	2	—	2	—	2	—	—	—	—	—	4		4		
	382	FLYING KARPET	.741	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1		1		
	367	T I L D E	.739	1	—	1	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	7	9	2	11		
	601	さちかぜ	.737	1	2	—	—	—	—	2	5	13	2	—	—	1	—	21	4	25	9	

5 海事普及委員会 (記事なし)

6 事故報告

(a) 「くろしおⅡ」遭難事故報告

艇長 高山秀文(千葉大学ヨット部)

((註. 遭難報告書は精細を極めた膨大なもので、大変参考になり、できれば全文を掲載したいと思いましたが、紙面の都合上やむを得ず縮少致しましたので、ご了承願います。 編集部))

(1) 遭難艇 「くろしおⅡ」 33.5呎 スループ 木造 アルミマスト 進水42年12月

乗組員 スキッパー 高山秀文(22才)(4年生)(NORC会員)

クルー 木口博之(")(")(")

北沢公康(21才)(3年生)(")

小林敏男(22才)(")(")

広橋修三(20才)(2年生)(")

渡辺芳夫(19才)(")(非会員)

安養寺明彦(20才)(")(")

丸 隆(24才)(OB)(NORC会員)

計 8名

(2) ログブック(抜萃)

7月26日 11:00 スタート 晴 風力3 風向ESE うねり1m

14:40 メンズル ワンポイントリーフ

18:00 風力5 風向E アカがたまる

21:00 これより1時間毎にタックを変える 30°~150°

27日 03:00 風力6 風向ESE 速力6kt

30分タックに切り替える

アカの浸入が甚だしい バケツ5杯

05:30 アカ漏れのためか電気関係不調にてコンパス使用不能となる。

補助コンパスに切り替える。

- 07:00 レギュラージブ、メンスル2ポイント半リーフ。
- 07:30 ヘルムスマンがリーヘルムが出てラダーがおかしいという。艇内より舵周辺を点検するが異状なし。
- 07:40 これ以上レースを続けても上り切れない。今なら明るい内に鳥羽に戻れる。リタイヤ決定。浜松Aero 0°
- 07:50 鳥羽へ転針 コース270°
ストームジブを降ろし、メンスルは2ポイント半以上巻き真追手で帆走。風力6、ESE、うねり4~5m、ワイルドジヤイブする。直感的にスケグに何か異状が起つたのではないかと思い、スケグボルトを艇内より確認する。ボルトに異状は見られなかった。快調に走る。
- 08:30 テイラーがスタボード側に重く感じる。スケグボルト異常なし。
- 10:00 本船後方より急速に接近、急いでジヤイブ(S→P)して本船をかわした所、そのままラフしてしまってコースをもどそうとしてももどらず。この時テイラーはポートには60°位は楽に切れるが、スタボードに10°位しか切れない。ラダーの故障を完全に知る。スケグボルトを調べたところ4本のうち、1本が取れ海水が艇内に流入、他の1本はボルトが空ら廻り、他の2本は固着していた。抜けたボルトの穴に色鉛筆をたたき込み海水の流入を防ぐ。
- 10:25 ラダーシャフトが抜けて、スケグ、ラダーが完全に海中に落ちる。シャフトの穴から真青の水が見える。
- 10:30 バウが風上に向いてしまうので、種々の手段を施すも効果なし。
- 10:50 バウからアンカーロープに布バケツをつけシーアンカーとする。NC旗を上げる。信号紅炎及びサイレンで救助を求めたが本船は気付いてくれない。
リーチングストラツツにベニヤのフロア板をロープで縛りつけて仮舵を作り、バックステーにロープで取り付けて操作してみるが全然効果

ない。

- 11:20 本船に知らせるため信号紅炎を焚き、ポートフックにオイルスキンをつけて振りサイレンを鳴らす。
- 11:30 本船が「くろしおⅡ」に気付き旋回して近づく。シーアンカーを揚げる。横付けするもうねり3~4mあるので船体がぶっかる。バルピットスプレッダーが破壊する。船腹もすりぎすだらけとなる。本船よりネットをおろしてくれ、全員本船に移る。
- 11:40 最後に海図と航海日誌をあげる。
ヨットの曳航を頼んだが、沈んでしまい恐れがあると思われ断念する。
- 11:45 本船の前進によりバウラインが切れる。
本船との激しい接触により、マストがデッキ部、スプレッダー部と三つに折れた。

3. 放棄後の船体

- 11:45 34° - 30' N 137° - 08' Eの地点で艇を離す。
- 17:30 管島1000m沖を漂流中 管島漁業組合の人に発見され、19:30管島漁港に保管さる。

4. 被害状況

(1) ラダー、スケグの折損流失

(これ以下は本船との接船時に受けたものである)

- (2) バウバルピットがとれ、曲る。
- (3) ステムプレートが曲り、ステムヘッドに長さ20cmの楔型の裂け目が出る。
- (4) スタンションがポートサイド2本、スターボードサイド4本曲る。
- (5) マストがデッキ上面、スプレッダー（マスト接合部）の2ヶ所で折れハリヤード類全部切れる。
- (6) アツパーシユラウド、バックステー切れる。
- (7) ターンバックル2本曲る。
- (8) スタボード中央部外板のこすり傷と、フルワークが内側に圧迫されて少々の凹みができる。
- (9) スタボードのレールキャップが一部もち上がる。

(10) ポートのレールキャップ及びハルに折損したマストによる擦傷ができる。

(11) ポートフックの頭部が折れる。

(12) トリムタブの整流板が流失する。

5. 鳥羽レース出艇前の検査

6月8日 安全検査を受ける。

7月11日 油壺ポートサービスに上架し、種々の修理点検を行った。この時スケグがぐらつく(スケグの最下端で左右2cm位)のことに気付き、福留氏に見てもらい、ボルト、ナットがゆるんでいるので艇内よりそれをしめて貰った。スケグは元通り固着されたが、7月13日に「くろしおⅡ」の設計者武市俊氏に、ぐらついていたスケグの状態を説明し、直接点検を頼んだが、その際スケグ取付け部分の強度に対する保証を得た。我々も単なるボルト、ナットのゆるみであって、締まつてさえいれば危険な状態になることは無いであろうと判断し、コーチの近藤順之氏、丸隆氏とも相談の上、一応鳥羽レース終了後もう一度スケグを点検することにした。

7月24日 鳥羽に於て船底に着きラダー、スケグを点検したが付け根の塗料に細いすじが入っている以外異状はなかった。取付けボルトも締っており、ぐらつきはなかった。

6. 事故に対する判断

(1) スタート直後、(11:30頃)石鏡の沖合3~4M位に材木運搬船が捨てたと思われる流木を多数発見したが、我々の艇は明るい時間であり、視界も良かったので、この流木の間をよけて通過しており、衝撃も受けていないので、流木にスケグを傷められたとは考えられない。

(2) レース前に潜ってスケグの異状(ボルト、ナットのゆるみやスケグのぐらつき)がないことを確かめているので、レース中(クロスホールドの帆走中)にスケグのぐらつきが序々に起り、リタイヤの直前と、その後の追手帆走に移ってからこの様な状態になったものと思われる。

7. ラダー、スケグの構造について

ラダー、スケグの全重量がスケグの取付けボルトで支えられ、スケグに対する横方向の外力は主にラダーシャフト(キールに対して72mm×120mmの面積で8φのボルト4本で左右28mm間隔で取付けられている。)で受けていることになる。又設計上ではスケグの材質は樺材になっているが、工事はすべて船用台板で行われた。又図面にあるボルトが1本実際には入っていなかった。ガジョンピントルの構造上、ラダー、スケグを組合せた上でキールへスケグを固着しなければなら

ないので、ボルトが入れられなかったとのことであるが、この点とスケグの材質に関しては建造中造船所側と設計者と了解済みで製作されている。

従って問題点は、

- (1) スケグが船用合板では、ボルトの締めに対し不適當ではなかったか。
- (2) ボルト数が設計図と異っていた点
- (3) 横方向の外力に対するスケグの強度（スケグ金物の横幅とボルトの位置）に対する点
- (4) ボルトの太さ（強度）の点

の4点だと思う。

8 救助信号を出したことについて

- (1) 操船が不可能になった。
 - a) スベアラダーを持っていなかった。（予備テラーあり）
 - b) ラダーとスケグを失った本艇は何もせずに風上に立ってしまう。
 - c) スターンからロープ（22mmのクレモナロープ50m）を流し、トリムタブ、エンジンを使得風下側へバウを向けて走ろうとしたが、波の頂点から谷へ落ちる時に猛烈な勢いでキールを中心に回転して風に立ってしまう。
 - d) 船内のフロー材を外してリーチングストラツツとロープを結び応急舵を作ったが効果がなかった。
- (2) 風下側は 230° ～ 290° 陸地であったので、自力でうまくかわらないので、艇体、人命の危険性の方が大きく成功率は非常に低いと思われた。
- (3) 加布良古水道附近まで15～16mなので流れ着いたらより大きな危険性が想像された。
- (4) 台風の接近によって気象、海象が増々悪化するの、時間の問題であった。
当時視界が良く、昼中の事故であったが上記のごとく悪条件が重なって危険な状況であったので乗員の生命の安全を考えて、本船に対して救助を求めることとした。

9 事故をふり返って

- (1) レース前に行われた上架時の点検のときの、スケグのぐらつきを単なるボルトのゆるみによるものと考え、適切な処置をしなかったことは、私達として十分反省している。スケグを外して点検し、何らかの手をうっておけば、事故は未然に防げたと思う。

ラダーシャフトをテイラー上部でとめておけば、スケグがとれてもラダーは簡単には落ちなかつただろう。又スベアラダーを持っていたら、そしてリタイヤーをもっと早目にしていたら、などと私達として考へなければならぬことが数多くある。

(2) 次に救助信号について気がついたことは、我々を救助してくれた商船三井の「淡路山丸」

(6746t) の発見当時の模様をお聞きしたところによると、当日ヨット遭難のニュースを聞いていたので特に注意しておられたようで、双眼鏡でワッチしていると何かブイらしい物が見えるとの報告で、近づいた所救助信号を出しているヨットだと判ったそうである。(当時ベアポールでNC旗を上げた状態) 白い艇体は白波と一語になり、よほど近づかないと、区別がつかないそうである。また、NC旗も、もっと大きなものをマストトップにでも揚げないと、ヨットがブイ位にしか見えないので意味がないと思う。

(3) 次に信号紅炎の数の問題であるが、私達は救助される前に2隻の貨物船(艇より5M位を航行中)に対して5本の信号紅炎を使ってしまい、救助されるまでには8本を費してしまった。安全規則でいわれている6本程度では、折角のチャンスを見すみす逃してしまう可能性が大きいと思う。(私達は、ライフラフトを除いて12本持っていた。) また15~20cmくらいの焰を噴き出す紅炎は、昼間は全然目立たないとのことである。

以上

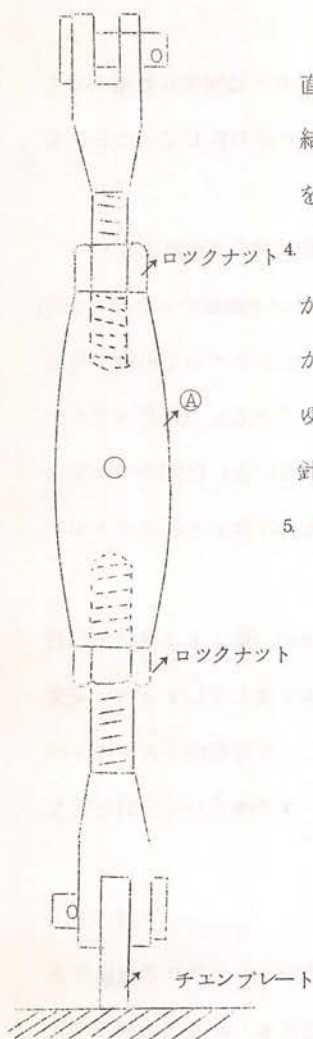
最後に、この度の事故に際しまして「淡路山丸」の方々、管島漁業組合の方々NORCの飯島常務理事、井上理事、渡辺理事、吉谷理事その他数多くの方々にご助力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

「足柄」事故報告書

艇長 福 永 昭

1. 事故発生日時 43年10月19日 12:30頃
2. " 場所 大島-伊豆半島間
3. " 状況 神子元回航后約2時間

ポートタックで帆走后、タック、スターボード、タックで帆走、12:30頃左舷アツパーシユラウド、ターンバックル④部が外れ紛失しているのを発見



直ちに予備ワイヤーでアッパーシユラウド、ターミナルとチェンプレートを結びクリップでとめ、ジブを下し、機走で伊東入港(17:15)棄権報告を帆走委員会に行った。

4. 事故原因 進水后日が浅く、シユークダウの機会がなかったため、リギンが延び、上りコースでアッパーシユラウドがゆるみ、何らかの理由で、**A**印が外れたものと思われる。

ゆるみ止め、ロックナットがあるにも拘らず、外れるものがある以上、更に針金まで固縛する必要があると思われる。

5. 尚アッパーシユラウドは 6ϕ (1×19)

ターンバックルは G I B B $\phi 7/16''$ である。

Ⅲ 内海支部

1 高松レース報告

11月22日夜23:00的形港をスタートした各艇は、ほんのわずかに吹くN Eをつかまへようとして、スピンを張ったり、観音に開いたりしたが、こんな状態が02:00迄続いた。やがて風はNN E風力3に変わりやつと快適にすべり出した。コミテイポートの真丸も波を白くひいて、レース艇のあとを追いかけたが、コースを南に、家島群島よりに狭った艇が多く、北側コースの「甲竜I」と逢っただけで、他艇はガスにかくれ見失ってしまった。この風も夜明けには落ち、フィニッシュ迄強くならなかった。微風が幸いしたのか、軽い艇に有利なレースであった。西内海支部より参加された田中氏の新造33 Footer「やしろ」(渡辺設計、天城と同形)は、「ミネルバⅢ」

とファストフィニッシュを争い、トップで入った。フィニッシュラインは屋島と西方ブイを結ぶ線で、11:00を過ぎる頃より一団となって各艇が這入った。

レース参加艇は10艇でなんとか、最終レースらしい華かさが盛上った。帆走委員より、「今後のレースは申込期日を厳格に守り、乗員の半数以上がNORCのメンバーである事との原則を守ってゆきますから新造艇のオーナーはクルーの登録を急いで下さい。」との申出があった。

レ ー ス 成 績 表

着 順	総合 順位	セー ル No	艇 名	T・C・F (旧ルール による)	オ ー ナ ー	所要時間	修正時間
1		807	やしろ	.752	田中 敬一	11-39-25	8-45-58
2		507	ミネルバⅢ	.781	貴伝名一良	12-01-00	9-23-06
3	③	73	ドンドロ	.700	前田 豊一	12-12-30	8-32-49
4	①	96	甲 竜 I	.683	岡本 充央	12-12-40	8-20-25
5		40	ミネルバⅡ	.704	榎谷 博	12-16-00	8-38-09
6	②	503	ステラマリス	.693	川崎 久生	12-19-00	8-31-49
7		525	甲 竜 II	.705	青木 太一	12-20-30	8-42-03
8		82	おのころ丸	.689	神村 正弘	12-28-00	8-35-22
9		57	さちかぜ	.715	塚本 修	12-39-20	9-02-55
10		520	菊	.698	山城 博己	14-38-00	10-12-51

2 忘年会・表彰式

12月1日 17:00より西宮ヨットハーバーの関西ヨットクラブで、忘年会・表彰式を行った。四十名を超える盛会で、東京から<<舵>>編集長土肥勝由氏、早稲田大学ヨット部の大先輩高原清彦氏をお迎え、和気あいあいの裡に談笑した。席上、松本哲理事より、レーティングについての説明があり、登録を未だ受けていないヨットは早急に計測しない限り、レースには出場出来ない旨要請があった。NORCの会費未納入者の処へは、ニュースが、配達されないので、納入を急がれたいとの事務局長津田氏に御注意に対しては、納入方法がわからない、どうすれば良いのかの声があったので、合田の処で一括し送金する手続を撰った。レースの反省、来年度の世話役等のお話のあと、表彰式に移った。担当部長井上透氏が所用で、欠席されたので、武内良夫君、中庭祐蔵君に御苦勞をおかけした。樽谷氏の司会はさすがに丁重で念のとどいたものだった。来年のはなばなし、活躍を期待して、本年の行事を終えた。

3 紀伊水道レース（7月21日～22日）報告の修正

NORCニュース第18号記載の紀伊水道レース（7月21日）の記録が、TCFの間違いの為誤っておりましたので下記の如く修正をお願いします。

艇名	ミネルバⅢ	甲風	甲竜Ⅰ
着順	1位	2位	3位
所用時間	23h.57m	26h.27m.50s	26h.50m
T.C.F	0.781	0.678	0.683
修正時間	18h.42m	17h.55m	18h.19m
修正順位	3位	1位	2位

NORC 内海支部

レース担当部長

合田 督

Ⅳ 東海支部

1 会議の状況

9月27日 総務委員会 於喜多八

① 各専門委員会の報告

安全委員会 10月中に安全検査合格艇の報告表を提出する

レース委員会 衣浦レース要項の発表

ネービーカップレース結果発表

前半期レース結果発表

(レース結果については後記)

② 来年度(昭和44年度)東海支部役員案の検討

10月3日 支部例会 於喜多八

① 衣浦レースについて

② 野島レースについて

③ 支部役員選出

9/27の総務委員会で検討された案通り44年度の東海支部の役員が後記のとおり選出されました。

各委員会の委員は委員長に一任

④ 「ヨットと通信」というテーマで広瀬氏(ネービーブルーⅡ)の講話

10月6日 衣浦レース スタート 08:00

結果については後記のとおり

10月14日 総務委員会 於喜多八

11月 3日 野島レース 00:00 スタート

結果については後記のとおり

11月 7日 総務委員会 於喜多八

2 来年度(昭和44年度)東海支部役員決定

10月3日に行なわれた支部例会において来年1月1日に始まる来年度(昭和44年度)役員を次のように決めました。

支 部 長 角 田 博
副支部長 丹 羽 由 昌
事 務 長 佐 藤 充 弘

鬼崎フリートキャプテン 水 上 健
三河湾フリートキャプテン 広 浜 之 雄
衣浦フリートキャプテン兼
ボートキャプテン 竹 内 佐知彦

(支部専門委員会)

安全委員長 今 関 康 志
レース委員長 禰 原 嘉 男
計測委員長 坂 井 繁 之
海事普及委員長 小 島 基 作
水路委員長 三 浦 雅 敏

(支部特別委員会)

「軽クルーザー」問題特別委員長 大 橋 郁 夫
通信対策特別委員長 伏 原 幹 一 郎
泊地対策特別委員長 水 谷 善 彦

(監 査)

監査委員 天 野 和 茂

このうち、新設の通信対策特別委員会はSOS自動発信器をはじめヨットの遭難通報のための有効な機器の調査研究、および支部で本年度より推進しているヨットにアマチュア無線局を開設することについての諸問題を担当することになっている。

また泊地対策特別委員会は急増するヨットの泊地対策を主眼として泊地の調査研究、官公関係先メーカー等との連絡調整を担当することになっている。

なお海事普及委員長に選出された小島基作氏(うずしお)は11月16日付をもって東京(東

海銀行秋葉原支店)へ転勤となったため、辞任の申し出があります。後任の人選については次回総務委員会で案を検討し早急に決定する予定です。

3 昭和43年度東海支部レース報告

本年度の東海支部のレースは去る11月3日の野島レースをもって全部終了しました。こゝに年間のレースの結果をお知らせします。所要時間、修正時間等については、その都度お知らせしていますから、順位のみ発表します。

なお、12月5日午後5時半より年末例会をかねて、表彰パーティを東海銀行主税町クラブにおいて盛大に行ないました。

主 催	レ ー ス 名	1 位	2 位	3 位
東海支部	伊勢湾レース	NAVY BLUEⅡ	PETIT PRINCE	あかちゃん
	熊野レース	EPIPUREAN QUERIDA		NAVY BLUEⅡ
	ネービーカップ レ ー ス	QUERIDA	NAVY BLUEⅡ	伊 勢
	野島レース	QUERIDA	PETIT PRINCE	伊 勢
	支部総合	QUERIDA	NAVY BLUEⅡ	EPIPUREAN PETIT PRINCE 伊 勢
鬼崎フリート	ポイントレース (1月～3月)	ALBATROSS	NAVY BLUEⅡ	EPIPUREAN LUNAⅢ
	鳥羽レース	ALBATROSS	あかちゃん	NAVY BLUEⅡ
	フリート総合	ALBATROSS	NAVY BLUEⅡ	あかちゃん
	三河湾レース	アクアマリン	ちどり	ALBATROSS
	衣浦レース	QUERIDA	NAVY BLUEⅡ	

V 京 都 支 部 (記事なし)

VI 西 内 海 支 部 (記事なし)

VII 会 員 及 び 登 録 艇

1 会 員 及 び 登 録 艇 の 現 状

4 3 1 2 1 現 在

	特別会員	普通会員	候 補 生	TOTAL	登録艇数
関 東 支 部	1 3 7	4 4 5	5 9	6 4 1	1 3 3
内 海 支 部	3 8	7 2	2 8	1 3 8	3 7
東 海 支 部	2 8	8 5	5	1 1 8	2 7
京 都 支 部	1 6	2 5	5	4 6	1 6
西 内 海 支 部	1 0	2 9	1	4 0	9
T O T A L	2 2 9	6 5 6	9 8	9 8 3	2 2 2

東海支部軽クルーザー安全規則案

I 一般規則 (NORC 安全規則 1968 による)

II 技術基準

1. 船 体

- a 全長 5m 以上
- b 復元範囲 100° 以上
- c 100° 傾斜状態で艇内に浸水をおこさぬこと
- d セルフベ어링コリビットであるが、または満水しても乗員を支える浮力を保つこと。
- e 乗員の半数以上が横になれる被われたスペースと、炊事の出来るスペースをもつこと。

2 装備・備品

- | | | |
|--------------------|-------|-----------------------|
| イ ビルジポンプまたはバケツ | 1 ヶ以上 | ト フ オ グ ホーン または 号笛 |
| ロ 航海燈 (海上衝突予防法による) | | チ ライフジャケット 乗員全員分 |
| ハ 消火器 ドライケミカル | 1 ヶ以上 | リ ライフ ブイ 1 ヶ以上 |
| ニ セール番号 規定のもの | | ヌ アンカー及びアンカーロープ |
| ホ コンパス | 1 ヶ以上 | (NORC 安全規則 8 条 5 による) |
| ヘ フラッシュライト | 2 ヶ以上 | |

2 会員の移動

(a) 新入会員

会員 No	氏名	住所 (TEL)	勤務先 (TEL)	フリート	所属艇
関東支部					
68-1000	勝山 弘 (特別会員)	神奈川県横浜市保土ヶ谷区榎木坂148 (045) 711-0530	研電通 (543) 8111 (代)	諸磯	(631) SUNS' SON
68-1001	中台 光雄	" 鎌倉市扇ヶ谷4-19-9 (0467) 2-6567	リンフォース工業㈱ (0467) 3-0767	葉山	(632) あすなろ
68-1002	舛田 政治	" 横浜市戸塚区波沢町2187 (045) 881-0882	マスダビル管理会社 (045) 881-1741	油壺	(633) TINKER BELL
68-1006	三木 貞守	東京都港区高輪1-4-26 日興三田ビル (443) 5351	CBA JAPAN, DIVISION		(634) MAHI-MAHI II
68-1007	釜口 昌久 (普通会員)	" 目黒区自由ヶ丘2-12-18 (717) 3111	(株)大島屋(714) 0511		(635) つばき
68-995	羽沢 正	東京都大田区中央4-1-11西村方 (771) 7303	アメリカン・エレクトロニクス・エンダプライゼ ス工業サービス研究所 (501) 2261	小網代	TILDE
68-996	上野 興一	" 中野区中野3-5-5 むつみ荘	日立化成工業㈱海外部 (212) 1111	"	NEPTUNE .K
68-997	平川 鉄三	神奈川県逗子市榎山4-14-27 遼子 (71) 4422	日本大学 (在学)	"	足柄
68-998	井上 藤吉郎	" 横浜市磯子区馬場町10-21 (045) 751-6231	東京芝浦電気㈱船見工場 (045) 511-1351 内 2367	シボニア	RED SHARK
68-1003	大平 則夫	" " 中原町430 (045) 761-0148	慶応義塾大学 (在学)	油壺	明日香
68-1004	石橋 国雄	東京都世田谷区緑芝4-28-10 (420) 3577	日本大学 (在学)	小網代	NEPTUNE IX
68-1005	添田 就正 (候補生)	神奈川県三浦郡葉山町堀内989 (0468) 75-0855	日本大学 (在学)	油壺	明日香
68-994	平野 信治	東京都目黒区中根町1-17-21 (717) 7061	成蹊大学 (在学)	油壺	CHRISTINA II
68-999	須田 勉	" " 下目黒4-2-17 (712) 6503	慶応義塾大学 (在学)	"	朝風 III

会員 No	氏名	住所 (TEL)	勤務先 (TEL)	フリート	所属艇
(内海支部)					
130	◎青木 太一	大阪市南区難波新地5-27 (641) 4982	甲南大学 (在学)	須磨	(525) 甲竜 II
131	宮野 堂次郎	東大阪市東豊浦9-12 (81) 2267	"	"	"
132	鈴木 一成	吹田市高野台4 B76-207 (71) 1785	"	"	"
133	△田中 満喜男	兵庫県明石市大久保町江井ヶ島			TARITA
134	◎山城 博己	大阪市城東区放出中1-760	山城精機研 (962) 1125	的形	(520) 菊
135	" 寿	" 放出町1329 (962) 1127	"	"	"
136	水無瀬 忠徳	大阪府三島郡島本町大字広瀬1386	原田みそ醸造 (861) 0086 2833	"	"
137	石井 康家	京都市左京区南禅寺北ノ町17 (771) 7401	奥丹湯豆腐屋 (771) 8709	"	"
(東海支部)					
117	松尾 国昭	名古屋市西区又穂町2-1又穂公司2-432	山陽スノゾット(株) (962) 3426	鬼崎	PETI PRINCE
118	◎大岩 章男	愛知県常滑市大谷字奥条126小鈴谷局(100)	叶ブレス 小鈴谷局 (100)	"	EPICUREAN
(西内海支部)					
43	◎北村 勉	広島県福山市海町618	ニュー錦水ホテル (09498) 2-2560 ~ 4		(70) AMOR
44	◎西岡 威夫	愛媛県松山市別府町209-16松山(51) 2733	松山市立浮穴中学校 森松(20)	松山	(808) 勝山
45	余田 実	" 山越町 松山(21) 9667	南海放送報道部 (41) 5131	"	"
46	宮内 完二	" 大字溝切甲403松山(77) 0261	養蜂業(自営)	"	"

(b) 住所変更

会員 No	氏名	住所
関東支部		
(特別会員)		
0107	河瀬直春	東京都調布市染地3-1-74 多摩川住宅は14-208号
4477	佐藤和義	富山県魚津市本江2410 杉野クリーナー製作所研究所内
6641	久野桂	東京都葛飾区東金町1-36 金町駅前団地1-1431
(普通会員)		
0154	福原秀高	東京都品川区上大崎4-6-16-928
4471	藤下周一	" 西多摩郡秋多町野辺字下原805-10
5566	長谷川太郎	" 港区六本木3-17-4
6671	須賀光一郎	広島県因島市三庄町日立造船沖田寮
6674	麻生雅幸	東京都世田谷区祖師谷2-1288 住友海上成城寮
7774	今関秀夫	神奈川県相模原市大沼東通り3855
7783	岡武人	" 鎌倉市小町2-4-15 高田方
6686	西岡一正	" 横浜市港北区大曾根町734 菅沼方
3383	土肥勝由	東京都世田谷区新町3-1-4
0062	福田義一	静岡県伊東市湯川6-3
2342	多々良一寿	愛知県渥美郡渥美町伊良湖ビューホテル内
7832	佐本昭生	東京都江東区辰己1-9 辰己団地51-507
7761	中馬勇	" 世田谷区三軒茶屋町1-5-19 東電第三 三軒茶屋寮内
68-889	小林和茂	千葉県千葉市花見川8-6-301
68-898	横山広章	東京都新宿区上落合2-630 田中方
68-911	小堀正志	神奈川県横浜市南区西仲町1-23 丸菱石油社内
68-971	大野 暁	東京都港区南青山2-22-4 秀和南青山レジデンス
5539	島田和夫	" " 高輪3-11-3 新井ビル302号
6604	高木通志	埼玉県川越市寺尾644

会 員 No	氏 名	住 所
5579	黒田 慎一郎	東京都北区西ヶ原218 十条製紙研修寮
6627	沢山 昇	" 渋谷区千駄ヶ谷3-59-8 原宿第2コーポ 505号
(内海支部)		
76	武谷 俊雄	大阪府吹田市藤白台3-1 B12-208号
94	渡辺 敬	兵庫県芦屋市東芦屋町42
107	山川 修三	" 明石市東野町2204-6
123	倉橋 滋	大阪市住吉区西住之江町5-28

勤 務 先 訂 正

会 員 No	氏 名	勤 務 先
7774	今 関 秀 夫	反田産業汽船 (株)
68-987	柳 生 正 宥	CORNES & CO, LTD 海上保険部
6604	高 木 通 志	伊藤精機 (株) 朝霞工場 (0484) 61-1079

(c) 会員間の異動

支 部	会 員 No	氏 名	所 属 艇
		(候補生より普通会員へ)	
関東支部	5531	宮 沢 秀 治	

3 新登録艇の紹介

支部	セー ル No	艇 名	RIG	クラス	L O A × L W L × B × d	オーナー	フリート
関東	617	足 柄	S	Ⅲ	31' 00"×23' 90"×9' 00"×5' 80" m	福永 昭	小 網 代
"	630	J O U R	"	Ⅳ	7.800×6.180×2.181×1.550 m	鈴木弥彦	シーボニア
"	631	SUN' S SON	"	Ⅴ	6.500×5.400×2.040×1.400 m	勝山 弘	諸 磯
"	632	あ す な ろ	"	"	6.500×5.400×2.040×1.400 m	中台光雄	葉 山
"	633	TINKER BELL	"	"	5.850×5.250×2.000×1.120	榊田政治	油 壺
内海	520	菊	S	Ⅳ	7.490× — ×2.300×1.470	山城博己	的 形
"	524	おのころ丸 Ⅱ	"	Ⅴ	7.000×5.700×2.320×1.230	神村正弘	—
"	525	甲 竜 Ⅱ	"	Ⅳ	7.490×6.030×2.320×1.500	青木太一	須 磨
西内海	807	や し ろ	S	Ⅲ	10.000×7.370×2.890×1.680	田中敬一	広 島
"	808	勝 山	"	Ⅴ	6.730×5.587×2.200×1.470	西岡威夫	松 山

あ と が き

昭和43年も余すところ半月余、おかげさまで「NORCニュース」も曲りなりにも第19号を生むことができました。

しかし、本年度発行の第16・17・18号を見ましても、報告ばかりで、味もそっけもないものでありますが、表題が「NORCニュース」ということでありますので、いたし方のないこととありましょう。

みなさまも、この表題にとらわれることなく、自分の体験談なり、外国雑誌などから得た知識なりを、どしどし披露していただけたならば「NORCニュース」ももっと味わい深いものになるのではないでしようか。

なお、44年度には、表紙も写真入りにして多少なりとも趣きを添えたいと思っていますので、写真の供出等について一層のご協力をお願いいたします。

終りにのぞみ、良き1969年、華々しき昭和44年をお迎え下さいますよう、心からお祈り申し上げます。

(高村記)

